

「草木塔」の心を求めて

仙道富士郎(山形大学学長)

私は学長として、山形大学の leading concept としての「自然と人間の共生」の実質化に努めてきました。

我が国のモラルの乱れは、物質的な欲望に基づく競争原理を旨とする社会の末期的症状と見ることも出来ます。いま世界は、この競争原理を超える 21 世紀の new paradigm を求めております。そのような状況下で、山形大学が leading concept として掲げる「自然と人間の共生」という理念は、十分に 21 世紀の paradigm の一つになり得るのではないかと思います。「日本よ 森の文化国家たれ」の著者、安田喜憲氏の言葉を借りるまでもなく、農耕民族として、自然との調和の中に文明を想像してきた我が国こそが、この new paradigm の発信者となるべきであります。

山形は草や木の命をいとおしんで草木塔を建立した地であり、「自然と人間の共生」の旗を高らかに掲げるのにふさわしい土地であります。

この講演では、21 世紀に新たな草木塔を立てて「自然と人間の共生」という理念の実質化に努めておられる千歳栄氏に「草木塔」についての話をお願いいたします。

草木塔

千歳栄 (株式会社千歳建設代表取締役会長)

草木塔にはじめて出会ったのは十数年前、山形県立博物館で、以前に館長をしておられた結城嘉美先生の『草木塔調査報告書』を見た時であった。建築を生業としている私は樹木とのかかわりがあり、この報告書を読んで、先人の樹霊に寄せた思いに感動した。

この調査報告によると、草木塔は山形県の南部にある米沢市・川西町・飯豊町を中心にした置賜地方に建立されており、五十八基を数えている。建立の年代は江戸中期の安永年間から明治・大正・昭和と続き、昭和五十六年までと記してある。その後も草木塔は県内各地に建立され、これを調査している船橋順一氏の報告では県内は九十四基になっており、最近では全国的に広がり、京都大原の三千院や東京都内にも数基建立され、総数では百一基にもなるという。

また揮毫されている文字は、「草木塔」「草木供養塔」「草木国土悉皆成仏」などである。

塔建立の理由についてもいろいろ説かれている。木や草を利用して生計を立てていた人々が草木に感謝し、伐採したときにその樹霊を供養するため。また、家屋を焼失し、山林を伐って再建したときもそうする。山で樹木の伐採や運搬をしている木流しの人たちが、危険な場面に遭遇したり災害に遭ったりするのは、伐られた樹木の怨霊の崇りに因ると考えての、鎮魂供養のためなどであるともいわれている。

草木塔がなぜ置賜地方に多いのかということについても、諸説があるようである。置賜地方は上杉鷹山公の藩政の中で生きてきた地域であり、鷹山公の、樹木や植物を尊重した思想の流れや、上杉家と高野山の真言宗とのかかわりで、草木塔が建立されたともいわれている。

また草木塔の石碑と湯殿山石碑が並立しているところもあるが、これは出羽三山の湯殿信仰とのかかわりである。湯殿山は出羽三山の総奥の院で、山形県内だけでなく東日本一円の信仰を集めた聖地であり、置賜地方だけで湯殿山の石碑は五百基を超えて建立されている。湯殿山は、江戸期には修験道の中心であった羽黒山と争いながらも、真言宗、すなわち真言密教を護り通した密教の拠点である。

真言密教を開いた空海は、著作である『卍字義』に、「草木也成何況有情（草木也成ず何ぞ況や有情をや）」と説いた。草木でさえ成仏するのであるから、有情である人間が成仏するのは当然であると論じたことは、草木に靈魂をみる心情であり、草木の霊を供養する石碑建立の基になったと思う。

また天台本覚論の「草木国土悉皆成仏」の思想も、天台宗の密教化と日本風土への融合化から生まれた思想であり、草木塔の碑名に用いられたものと思われる。

立石寺で有名な山寺に、山形市が山寺芭蕉記念館を、隣接地に民間企業が山寺風雅の国という施設を建設したとき、私はその建築を担当させていただいた。敷地に立っていた樹木のうち、どうしても伐らなければならない数本の樹木があり、その霊を供養するため、施主にお願いして草木塔を建立した。その草木塔の傍に、今なぜ草木塔をここに建立するのかを碑文にして建てた。碑文は日頃ご指導をいただいている哲学者の梅原猛先生にお願いして書いていただいた。

————— 以下草木塔碑文より引用 —————

草木塔というものが山形県にたくさんあることを聞いて、私は一種の感動を禁じ得なかった。それは、少なくとも私の住んでいる近畿地方には存在しないが、まさにそれは日本仏教の「山川草木悉皆成仏」という思想を具現化したものである。私は、日本に仏教が入って「山川草木悉皆成仏」というような思想がで

きたのは、もともと日本には草や木に生きた神を見る思想があったからだと思う。山形にこのような草木塔が多いのは、そこには多分に一木一草の中に神性を見る土着思想が強く残っていたからであろう。

今ここに新しい現代の草木塔が建立されるという。それは目立たないけれど、甚だ時世にそった快挙であると思う。今、世界の人はいもう一度人間の生命がいかに草木の生命とつながっていて、草木とのつながりなくして人間の生命がありえないことを深く認識しなければならない。この時にあたって、新しい草木塔の建立は、時代に一つの警鐘を与えるものであらうと思う。

梅原猛

引用ここまで

今、地球環境の破壊が急速に進みつつあり、このままでは人類の生存さえ危ぶまれる状況となっている。世界各地で森林伐採などの自然破壊が進み、日本も例外ではない。草木成仏の思想をもって生きてきた日本人までが、なぜ自然を破壊するようになったのであらうか。それは近代文明といわれる科学技術や合理主義、そして物質重視や経済至上主義が原因であるといわれているが、その根底には自然に神性をみて畏敬する思想が失われつつあるからだと思う。

草木塔は草木を愛し、その精霊に感謝して供養するアニミズム的思想と、自然や草木に神威力を感じて畏怖するマナイズム的思想の併存から生まれたことを思うとき、先人が遺した貴重な精神文化である草木塔建立の思想を見直し、森と緑を中心とした地球環境保全の運動に役立つことを願うこと切である。

(中央公論一九九八年九月号に掲載)

写真Ⅰ：最古といわれる塩地平の草木塔（米沢市）

写真Ⅱ：山寺風雅の国の草木塔（山形市）